

北海道のよさを見つけよう ～酪農体験～

目 標

- ・酪農体験を通して、「食」に対する関心を高め、食物を大切にする心を育てる。
- ・酪農に携わる人々の努力や工夫、願いや喜びを知り、食に対する意識を高める。

育てたい力

- 酪農に関する体験活動から農業に携わる人々の思いや願いに気づき、自然や食物をより大切にしていく力
- 自分たちの住む北海道のよさに気づき、分かったことや考えたことを自分なりに表現し伝えようとする力

主な学習活動（社会科 3 時間、総合的な学習の時間 10 時間、学級活動 2 時間）

北海道の産業と
人々の暮らし
(4 月)

食指導
「カルシウムちよ金箱」
(6 月)

酪農体験
むらかみ牧場
(9 月)

わたしのおす
め
北海道

- ・社会科で、北海道の酪農や、乳製品の生産などについて学習を深めた。北海道の牛乳生産量がとても多いことや、北海道の乳製品の素晴らしさを学び、酪農への意識を高めた。
- ・食指導で、骨はカルシウムをためる貯金箱であることや、カルシウムを多く含む食品について学び、毎日飲む牛乳の大切さについて考えた。(栄養教諭による指導)
- ・牧場で搾乳、子牛への餌やり、アイスクリーム作り、小動物との触れ合いを体験した。牛に直接触れるのが初めての子が多く、どの体験も驚きと発見の連続だった。子牛が親牛から離されて飼育されること、雄牛は食肉用として売却されることなどの説明から、食が「いのちのつながり」の中で成り立っていることが分かり、食への感謝の気持ちをもった。



乳牛の体温を感じながらの搾乳体験からは、普段給食などで飲んでいる冷たい牛乳とは違う、命の温かさを感じ取ることができた。村上社長からは、乳牛を飼育する努力や苦労だけでなく、食料生産で社会を支える生産者としての喜びや命を育む誇りなどについて話していた。生活を支えている生産者の願いや喜びに触れ、自分たちの食を振り返り自然を大切にしようという気持ちが強くなった。

- ・自分たちが住む北海道について調べる活動を行った。カントリーサインに牛が描かれた市町村がいくつもあることや、菓子や乳製品が町の特産として紹介されていることを知り、北海道と酪農の関わりの深さに気付いた。

取組を終えて

子どもの声（感想）

子どもからは、「自分たちが飲んでいる牛乳がこんなに牛の乳からできていることが分かった。」「朝 4 時から仕事していることを聞いて、酪農の大変さが分かった。」「牛は体温が高く、触ると温かかった。」「牛舎は大きな扇風機があって、1 日に 2 回掃除をして、牛が気持ちよくいられるようにしていることが分かった。」など、実際に体験したからこそその感想が寄せられた。

取組の成果

「百聞は一見に如かず」というように、体験そのものが大きな成果であった。子どもは 600 キロもある牛の大きさや触れたときの温かさや柔らかさに驚き、搾乳などの体験をすることができた。命（生き物）を扱う仕事の大切さ、飼育の大変さや、土日も含めて毎日仕事があるという現実も知った。こんなに苦労して作ってくれた牛乳を大切に飲もうと思った子どもが多くいた。また、酪農をはじめ、自分たちが住む北海道の素晴らしさに気付くことができた。日々の生活では、各学級で給食の残量が減ったり、完食できた回数が増えたりし、食への意識を高めることができた。

体験先、関係機関

むらかみ牧場（恵庭市）